

# 国文学研究資料館及び橘樹文庫蔵梅尾類切（桂様切）『万葉集』の

## 高精細マイクロスコープによる紙面観察

舟見一哉・松原哲子・徳植俊之・田中大士  
佐々木孝浩・甲斐温子・古澤彩子・海野圭介<sup>(1)</sup>

\*キーワード

古筆切・料紙観察・高精細マイクロスコープ・マテリアル分析

### はじめに

国文学研究資料館は、文部科学省の推進する大型学術フロンティア促進事業の一つとして採択された、「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」（平成二六年度（二〇一四）～令和五年度（二〇二三）<sup>(2)</sup>）と題した研究計画により、国内外に所蔵される三〇万点におよぶ古典籍の全文デジタル画像データの収集とそのオープン化を進めている。画像データの整備と公開の次の段階としては、その機械可読化や情報抽出技術の革新を含む、蓄積された古典籍画像データに基づくデータ駆動型の研究展開を計画しているが、そうした将来計画の中

で、古典籍原本として伝わるモノ資料そのもののフィジカルデータとインターネットを通して発信されるデジタルデータの架橋やギャップの調整も大きな課題であると考えている<sup>(3)</sup>。現時点ではデジタルデータとしての発信と有意義な活用が難しい状況にあるモノ資料それ自体の質感などをどのようにしてデジタルデータとして蓄積し発信するかは、その技術開発とともに検討すべき課題ではあるが、人文学側からのアプローチとしては、既存の研究成果がそれを凌駕するために必要とするモノ資料のデータを作成し発信することを基盤として、個別事例の検討と蓄積から包括的な手法を考える道筋を探ることが有効であるように思われる。

そうした書物をめぐるモノ資料を対象とした分析機器の一つとして、二〇二二年度にはキーエンス社製の高精細マイクロスコープ・VHX-

8000を設置し、紙資料の観察とそのデータ集約を進めつつ、書物の構成要素としての紙資料を対象とした実験系の確立を試みている。また、こうした機器類の整備と並行して、文部科学省が推進する私立大学プランディング事業「源氏物語研究の学際的・国際的拠点形成」の一環として紙資料の分析と研究を行う実践女子大学文芸資料研究所と協定を締結し、両者の協働のもと先述の課題への対応を進めている。国文研に設置した機器は、今後は大学共同利用機関として共同利用に供することを計画しているが、それに先立ち、二〇二一年度からは連携諸機関と共同で資料観察と分析を開始した。本報告はそうした分析成果の一部である。本来ならば対象資料の料紙の構成要素としての紙繊維の分析結果とともに報告すべき内容ではあるが、精緻な分析に至る以前の観察でも、従来見落とされてきた、あるいは気づかれなかった重要な事柄が見出されている。既存の日本文学分野の研究にインパクトを与える事例の一つとして、本稿では梅尾類切（桂様切）と称される『万葉集』伝本の紙面観察結果の一部を先行して報告することとしたい。

### 一 梅尾類切（桂様切）『万葉集』をめぐる近年の研究動向

現存する最古の『万葉集』写本の遺品として名高い桂本『万葉集』（一世紀後半頃写）には、その僚巻から切り出された断簡が古筆切として伝わる事が知られている。いずれも巻第四を書写したもので、御物の零巻一卷とそこから切り出されたと思しい断簡四十葉ほどが確認されてい

る。この断簡として伝わる部分は、江戸時代より梅尾切と称して珍重されてきた。また一方で、『万葉集』の研究史では桂本として知られている（そのため、本稿ではこの資料を「梅尾切（桂本）」と称す）。薄紫などの色々に染められた華麗な料紙に金銀泥で鳥や水辺が描かれ、流麗な筆致で和歌が記された古代の書芸術の水準を示す名品であり、かつ平安時代に行われた古層の『万葉集』の本文のあり方、その読まれ方を現代に伝える研究資料でもある。この梅尾切（桂本）には、それに類似しながらも、筆致や書式が異なる断簡が伝わっていることが知られる。これらは古筆切としては梅尾類切、『万葉集』の研究史では桂様切と称されている（先の例と同様にこの資料については以下「梅尾類切（桂様切）」と称す）。

この梅尾類切（桂様切）は、梅尾切（桂本）に比べると、いかにも筆線が弱く、梅尾切（桂本）よりはだいぶ下った時期の書写であろうことが指摘されている<sup>5</sup>。しかしながら、その書写時期やその所収本文と梅尾切（桂本）所収本文との関係についてはさまざま見解があり、その素性や資料性についても合意を得ていなかった。

こうした状況の中、田中大士によって、梅尾類切（桂様切）に書写された『万葉集』の本文が仙覚本と称される鎌倉時代に整定されたテキストの系統であることが明らかにされたことは、梅尾類切（桂様切）の素性とその資料性を考える上で極めて重要な成果であった<sup>6</sup>。

田中によれば、梅尾類切（桂様切）に書写される本文は、仙覚本以前には遡ることが出来ず、従って梅尾類切（桂様切）もそれ以降に作成さ

れたものであることは揺るがない。ただし、そのように資料性を把握した場合、今後解明されなければならない疑問点も二点指摘されている。その一点は梅尾類切（桂様切）の表記形態の問題で、梅尾類切（桂様切）は通常は和歌本文と題詞（和歌の前に付されてその和歌が詠まれた事情などを説明する文章）の記される高さが、和歌に対して低い位置に記されているのに対して、個人蔵の一点（後述の橘樹文庫蔵本）は和歌に対して高い位置に記されているということであった。この表記方法は梅尾切（桂本）に一致しており、梅尾類切（桂様切）それ自体が同一の写本から切り出されたものであるのか否か、途中から書式が変更されたのならばその理由如何など、資料自体の同一性の保証を妨げる事例に対する説明が求められていた。もう一点は漢字で「梅」と記される部分の仮名表記を「うめ」とするか「むめ」とするかとの差異で、「うめ」と記されてしかるべき部分に「むめ」と表記されることの理由の説明が求められていた。

これらの疑問の内、後者についてはさらなる検討が求められるが、前者については今回の高精細マイクロスコープによる料紙観察によって新たな知見を得ることができた。

また、田中による成果公表とほぼ同時期に、徳植俊之によって梅尾類切（桂様切）の料紙観察の報告が行われており、従来知られなかった知見が提示された。<sup>7</sup> 徳植論文には、梅尾類切（桂様切）の下絵は後入れ（テキストの書写の際には記されていなかったが、美術品としての価値の向上のために後代に紙面に装飾を加えたもの）であること、巻皺（卷子本

として伝わる資料の紙面に刻まれた皺。巻き取りが繰り返されることとして紙面に対して水平方向に皺が生じる）と思われた紙面の欠損が墨などによってそれらしく書き入れたものであることといった、梅尾類切（桂様切）の作成過程を想像させる驚くべき事例が報告されている。

田中、徳植の指摘により、梅尾類切（桂様切）は、従来漠然と想定されていたような梅尾切（桂本）の現在失われた部分に由来する補写や模写などではなく、本質的に関連しないテキストにもとづき極めて類似した紙面構成が行われたものであり、かつ梅尾切（桂本）に類似した紙面に見せるための操作が行われていることが知られることとなった。

田中・徳植の指摘を受け、高精細マイクロスコープによる古写本の料紙分析の実験系の確立をめざしていた海野圭介は、新たに国文学研究資料館の所蔵となった梅尾類切（桂様切）を観察し、記される下絵の内、少なくとも金による装飾は墨書の下に位置すること、巻皺と思われる部分には繊維の断絶が観察され、両紙に何らかの力が加えられたための破損の跡として観察されることなど、徳植による観察結果とは異なる知見を得た。<sup>8</sup>

こうした成果の積み重ねを経て、二〇二二年七月十日に、実践女子大学文学芸資料研究所と国文学研究資料館の協働による、紙資料を対象とした分析の文理融合型研究のキックオフ国際シンポジウムが行なわれた際<sup>9</sup>に、徳植の観察した橘樹文庫所蔵の梅尾類切（桂様切）と海野の観察した国文学研究資料館所蔵のそれを同時に観察して料紙の状態を記録しつつ検討を行うこと企画し、シンポジウムに参加いただいた徳植氏の

助力を得て、同年八月九日に国文学研究資料館において実施することになった。その際には、『万葉集』写本に詳しく、梅尾類切（桂様切）所収本文の素性の解明を行った田中大士、および田中の科研費（基盤研究（B））の研究チームとして『万葉集』テキストの解明を進めている、甲斐温子、古澤彩子、日本の書物の歴史と古筆切資料に詳しい佐々木孝浩、先のシンポジウムの登壇者で同じく古筆切資料の分析的研究を進めている舟見一哉が参加し、国文学研究資料館において料紙分析の実験系確立の実務を担当する松原哲子が機器操作を行い、資料の観察と検討を行った。

先にも示したように、本報告は当該資料の料紙自体の分析に至る前段階の観察記録ではあるが、『万葉集』の最古写本である桂本『万葉集』（梅尾切）と何らかの関連を有する資料として取り扱われてきた梅尾類切（桂様切）の素性解明に繋がる知見でもあり、『万葉集』テキストそのものの問題へと波及する事柄でもあるため、あえて先行して報告することとした。以下、観察対象資料の書誌と書影の提示、観察結果、高彩度デジタル顕微鏡による観察画像の順で観察結果について述べたい。

## 二 国文学研究資料館及び橘樹文庫蔵梅尾類切（桂様切）『万葉集』の書誌と書影

国文学研究資料館所蔵の梅尾類切（桂様切）は軸装一幅。二〇二二年度購入資料。『古筆学大成 二二 万葉集 万葉集抄』（講談社、一九九〇年）

三七頁資料番号三九に該当する。現状の書誌は次の通り（以下、同資料を「国文研蔵本」とも称す）。

国文学研究資料館蔵梅尾類切（桂様切）『万葉集』断簡（ヨ六一―五四）

〔鎌倉―室町時代〕写 一幅

掛幅装。本紙（二五・一×一四・〇cm）、台紙（二四一・五×四四・五cm）。料紙は楮紙。着色しない料紙に金銀泥で蝶・草花等を描く。一面八行。字面高さ約一七・〇―一七・三cm。用字は漢字。平仮名。極札等は附属しない。蓋表に「梅尾切」と墨書した桐箱を附属する。

肉眼による観察では、紙面に巻皺と思われる水平方向の皺が認められた。料紙の紙面はやや毛羽立ちがあるように感じられる。墨色に不審な部分は認められず、墨書部分に補筆・加筆等は行われていないように見える。『万葉集』巻七・一一一―一一五―一一一六番歌を記す。田中大士によって梅尾類切（桂様切）が仙覚本系統の本文を記した資料であることが指摘された際にその具体例として示された部分を含み、梅尾類切（桂様切）の分析には欠くことができない資料である。

当該断簡に記される全文は次の通り。書影については後掲図1参照。

玉津島能見而伊座青丹吉平城有人

之待問者如何

たまつしまよくみていませあほによし

ならなるひとのまちは、いかに  
塩満者如何將為跡香方便海之神我

手渡海部末通女等

しほみたはいかにせむとかわたつみの  
かみかてわたるあまのをとめら

橘樹文庫所蔵の梅尾類切（桂様切）は未装のマクリ一枚。『古筆学大成』二一『万葉集 万葉集抄』（講談社、一九九〇年）未掲載資料。橘樹文庫は徳植俊之によるコレクションの称で、すでに同氏によって詳細な検討が報告されている<sup>12)</sup>。現状の書誌は次の通り（以下、同資料を「橘樹文庫蔵本」とも称す）。

橘樹文庫蔵梅尾類切（桂様切）『万葉集』断簡

〔鎌倉～室町時代〕写 一幅

本紙（二一・六×一三・六cm）。料紙は楮紙。着色しない料紙に金銀泥で柳・岸及び水流を描く。一面八行。字面高さ約一七・〇～一七・一cm。用字は漢字。平仮名。極札等は附属しない。

肉眼による観察では、紙面に巻皺と思われる水平方向の皺が認められた。料紙の紙面はやや毛羽立ちがあるように感じられる。墨色に不審な部分は認められず、墨書部分に補筆・加筆等が行われていないように見える。『万葉集』巻八・一四三二～一四三三番歌を記す。現在確認される

資料の範囲内では、題詞部分を和歌より高く記す唯一の資料であり、梅尾類切（桂様切）の分析には欠くことができな資料である。

当該断簡に記される全文は次の通り。書影については後掲図2参照。

くたらの、はきのふるえにはるまつと  
すみしうくひすなきにけむかも

大伴坂上郎女柳歌二首

吾背兒我見良牟佐保道乃青柳乎手

折而谷裳見綵欲得

わかせこかみらむさほちのあをやきを

たをりてたにもみるいろにもか

打上佐保能河原之青柳者今者春部

三 高精度マイクロスコープによる梅尾類切（桂様切）『万葉集』

断簡の観察

前掲資料の観察は、国文学研究資料館に設置されたキーエンス社製の高精度マイクロスコープ・VHX-8000を用いて行った。この装置は、以前より普及している簡易型のデジタルマイクロスコープの欠を補う次のような機能を備えている。

①観察対象をモニターに映し出して観察すると同時に、投影された画像を撮影し記録することができる。その際には保存データに観察した年月

日及び時刻が自動で登録される。これに観察者が任意に設定する文字列等を加えることで、画像ファイル自体にごく簡易な観察メモとしての機能を持たせることができる。

②レンズの倍率を変えることによって、紙表面のおおまかな様子から極めて細かな繊維の状態、繊維の間に含まれる小さな夾雑物などの確認まで一連の作業としてシームレスに行うことができる。倍率の変更の際にも物理的なレンズ交換などの操作は不要であり、指定した倍率に対応したレンズが自動で配置される。機器の操作は原則としてモニター上で行うため、顕微鏡機器の取り扱いに精通していない人文系の研究者にとっても、短時間のチュートリアルを受けることで利用が可能である。国文学研究資料館に設置された機材では、レンズ倍率二〇倍から二五〇〇倍までの観察が可能で、レンズ倍率二〇倍の設定ではおよそ縦一センチ、横一・五センチの範囲がモニターに映し出される。この倍率でまず紙資料全体の様子を確認し、一〇〇倍、三〇〇倍、五〇〇倍といった順に、倍率を上げて、肉眼では確認できない微細な部分を観察することが可能である。

③一般にレンズの倍率を上げると焦点のあう範囲が限定され、撮影した画像にも対象物の一部のみが明瞭に映し出され、多くの部分は曖昧な像となることが少なくない。例えば、紙資料は複数の繊維が絡み合っており、高倍率下の観察では、一番上の繊維に焦点を合わせると下側の繊維の画像はぼやけてしまい、明確な像を得ることができない。この機器では、観察対象物の最も下層に位置する部分から上方に向かっ

て設定した間隔で数枚から数十枚の連続した画像を自動で撮影し、それらの画像を合成して観察対象物のすべての部分の明瞭な像を得ることができる。

④照射される光線の位置や方法を設定することが可能であり、偏光による観察によって特殊な反射を示す物質を抽出したり、斜光を照射することによって表面の凹凸を確認するなど、さまざまな用途に対応することができる。

本稿において報告する梅尾類切（桂様切）の観察結果は、先行研究において互いに異なる結果が提出されていた、「一」金銀泥による描画部分、「二」皴部分の二点と、この二点の観察の途上で新たな知見を得ることができた橘樹文庫蔵本の「三」題詞部分の三点についてである。

#### 「一」金銀泥による描画部分の観察

先行研究において、梅尾類切（桂様切）の下絵は和歌を記した墨書の上に描かれたもの（いわゆる「後入れ」）であり、書写される和歌の内容に関連する図様が選択されて描かれている例も認められるとの指摘がある。梅尾類切（桂様切）の制作事情を考える上で重要な事柄であり、金銀泥による描画と墨書部分が重なる箇所を観察をあらためて行った。なお、国文研蔵本と橘樹文庫蔵本を対照して比較すると、前者に対して後者の描画はやや稚拙に見える、発色も幾分異なるような印象を受ける。その差異の原因の解明には画材の成分分析も必要となるように思われるが、当面の課題である金銀泥による描画が和歌本文を書写する墨書部分

よりも先に描かれたものなのか、後代に書入れられたものなのかという点についてのみ観察結果を示す。

#### ① 国文研蔵本

描画は金泥と銀泥によると推測されるが、国文研蔵本には明らかに金泥による描画の上に墨が定着していると判断される部分があり、金泥による描画が墨書に先行するものがあることが確認される(図3)。

一方、銀泥による描画は先後の判断が難しい。一見すると墨書の上に描かれているように見える例が多く、墨↓銀の順に定着したように見える部分もあり(図4)、また銀↓墨の順に書写されたものの上部の墨がはじかれてしまっているように見える部分もある(図5)。

#### ② 橘樹文庫蔵本

描画は金泥と銀泥によると推測されるが、先行研究において指摘されるように墨書の上に金の描画が定着しているように見える部分があり、金泥による描画は墨書の後に加筆されたものであるように見える(図6)。但し、拡大して見ると、金泥による描画部分には金↓墨の順に書写されたものの上部の墨がはじかれてしまっているように見える部分もある(図7)。

一方、銀泥による描画は国文研蔵本の例と同じく、墨書の上に描かれているように見える例が多く、墨↓銀の順に定着したように見える部分もあるが(図7)、その前後は判然としない例が多い。

金銀泥による描画部分については、国文研蔵本に金泥による描画の墨書に先行すると判断される事例が確認されたが、すべての描画が同様に

観察されたわけではない。すべてが同時期に描かれたものか否かも不明であり、後代の補筆が交じる可能性も考慮されるため、今後、金銀泥部分の成分分析を蛍光X線によって行い、新たな判断材料を得ることしたい。

#### 二二 皺部分の観察

先行研究において、梅尾類切(桂様切)には、肉眼では皺のように見える部分が実は皺ではなく、墨等で線が描き加えられている部分があるとの指摘があり、巻皺のように見える部分の観察をあらためて行った。

#### ① 国文研蔵本

巻皺に見える部分を観察すると繊維の断絶が認められ、何らかの力が加えられたことによる破断の痕跡が肉眼では皺として観察されていると考えられる(図9)。ただし、一部分には繊維の断絶が明確には観察されない箇所も認められた(図10)。これは料紙に何らかの力が加えられて歪みが生じたが、繊維の破断まで進行していない例と判断される(図11)。なお、橘樹文庫蔵本の観察によって指摘されたような墨等によって線描されたものが肉眼では皺のように観察される明瞭な事例は見出せなかった。

#### ② 橘樹文庫蔵本

巻皺に見える部分を観察すると繊維の断絶が認められない部分が多々認められる。先行研究によって指摘された通り、墨等を用いて皺に見るように墨線が描かれていると推測される(図12)。このような処置が

行われた理由については、「三」で示す題詞部分が和歌本文より上に記されていることと関わっていると考えられるため、後に「三」の観察結果と併せて示す。

先行研究によって梅尾類切（桂様切）は、梅尾切（桂本）に似せて作られたものであることが想定されており、その原形態は冊子本あるいは手鑑に推すための一枚物であった可能性も指摘されている（後者の場合には手鑑の流行する江戸時代以降に作成されたものである可能性が生じる<sup>13</sup>）。卷子本に特有の巻皺と推測される皺の跡が国文研蔵本に観察されたことは、梅尾類切（桂様切）が元来は卷子として仕立てられたものであった可能性を示唆しており、従来想定されてきた梅尾類切（桂様切）の成立事情とは矛盾することとなる。現時点ではこれらを無理なく説明する見方はなく、他本の観察の機会を得てあらためて考えることとした。

### 「三」 題詞部分の観察

橘樹文庫蔵本は現在知られる断簡の範囲内で唯一、題詞が和歌本文より上に記されている。この表記形態は梅尾切（桂本）と同じで、他の梅尾類切（桂様切）とは異なるため、資料の同一性の再検討と書写事情に関する合理的説明が求められている。橘樹文庫蔵本を肉眼で観察したところ紙面に異常は認められないように見えたが、透過光と斜光によって観察を行った舟見一哉によってこの題詞部分が本紙から一旦切り取られた後に貼り直されたものである痕跡が確認されたため、当該部分につい

て高精度マイクロスコープによる観察を行った。

その結果、橘樹文庫蔵本は当該の行を□×□cm程の縦長の長方形状に切り取り、和歌本文より一文字程度上から題詞が始まるように継ぎ直していることが確認され、後代に加工されたものであることが理解された（図12～13）。料紙の裁断と接着は、肉眼や簡易型のマイクロスコープ等での観察でもほとんど気づかないほどに巧妙に行われている。また、その接合部に隣接して「三」で示した墨等を用いて皺のように見える墨線が加筆されているが、これは縦方向の継ぎ目の痕跡によって生じる料紙の違和感から目を逸らし、それを隠すために行われた処置であったと推測される。

以上の観察結果からは橘樹文庫蔵本には次のような操作が行われていると考えられる。

- ①当該の行を一七・八×一・八cm程の縦長の長方形状に切り取る。
- ②和歌本文より一文字程度高い位置から題詞が始まるように貼り込む。

- ③前掲②の操作をしたために料紙上部にはみ出した白紙部分を切り取る。

- ④前掲②の操作のため料紙の欠落が生じた下方部分に切り取った上部分の料紙を貼り込む。

- ⑤縦方向に生じた継ぎ目による料紙の違和感を払拭するため、横方向へ皺に見えるような墨線を加筆する。

梅尾類切（桂様切）をめぐる未解明の課題の一つであった、題詞の書

記位置の高さの問題は、梅尾類切（桂様切）のテキストの問題としては考慮しなくともよいこととなった。

## おわりに

文学作品に限ることなく、紙媒体に書写されて伝えられてきたテキストには、本稿で事例報告を行った梅尾類切（桂様切）のように、その支持体としての料紙になんらかの加工が加えられる可能性は排除できない。実際に、古筆切や浮世絵などの美術品として伝領された紙資料には、紙面に何らかの手が加えられて伝わる例が少なくないことが指摘されている。<sup>14</sup>古筆切に限って見ても、紙面構成や文字造形をより美しく見せるために、詞書や作者名の一部だけが記された部分、また、付訓や書入れ注記が削り取られて消去されている例や、本来連続していない部分の料紙を継いで紙面構成される例（「呼び継ぎ」と称される）<sup>15</sup>などが確認されている。<sup>16</sup>

こうした改変の事例は、画像のみからでは詳細が理解されない場合も多く、他に類を見ない特異な事例と判断されてしまうことも想定される。書物や文書類のデジタルデータの配信が加速度的に進展する時代であるからこそ、そうした事態を防ぐためにも、モニターに映し出される画像の基づく原資料のマテリアル情報は正確に記録されて伝えられる必要があるだろう。本報告の提示する事例は、作品それ自体のテキスト上の疑問を光学的観察が解決した例としても興味深い事例と言え、デジタル環

境下におけるマテリアル分析の重要性を証する事例とも言える。

なお、本報告においても判断がつかず今後の課題として残されたテーマについては、本資料の料紙データの分析成果と併せて機会をあらためて報告を行うこととしたい。

「付記」本論文は、国文学研究資料館古典籍データ駆動研究センターによる「データ駆動による課題解決型人文学の創成」準備研究による研究成果の一部であり、また、実践女子大学私立大学ブランディング事業「源氏物語研究の学際的・国際的拠点形成」、日本学術振興会「SPSの科学研究費補助金の助成（基盤研究（B）「万葉集仙覚校訂本の総合的研究」課題番号18H00646、代表者・田中大士）による研究成果の一部である。本研究に関して貴重な資料を提供いただいた徳植俊之氏に感謝申し上げます。

## 〔注〕

（1）舟見一哉（実践女子大学）、松原哲子（国文学研究資料館）、徳植俊之（大東文化大学）、田中大士（日本女子大学）、佐々木孝浩（慶應義塾大学附属研究所斯道文庫）、甲斐温子（早稲田大学大学院）、古澤彩子（日本女子大学）、海野圭介（国文学研究資料館）。

（2）このプロジェクトについては <https://www.nijl.ac.jp/pages/cijproject/> 参照（二〇二二年八月三十日確認）。

（3）この計画については <https://www.nijl.ac.jp/pages/cijproject/>

images/datakundou.pdfに概要を示している（二〇二二年八月三十日確認）。

(4) このプロジェクトについては[https://www.jissen.ac.jp/branding\\_senji/](https://www.jissen.ac.jp/branding_senji/)参照（二〇二二年八月三十日確認）。

(5) 梅尾類切の書写年代については、佐佐木信綱等編『校本万葉集 首巻』（校本万葉集刊行会、一九二五年）では「足利時代」、春名好重『古筆大辞典』（淡交社、一九七九年）では「鎌倉時代」、『古筆学大成 一二』（講談社、一九九〇年）では「江戸初期」、『和歌文学大辞典』編集委員会編『和歌文学大辞典』（古典ライブラリー、二〇一四年）では、「室町時代写か」と判定されており、鎌倉時代から江戸時代初期まで推定される書写年代には約三百年の差異がある。

(6) 田中大士「桂様切（梅尾類切）万葉集の再検討」（『万葉集研究』三八、二〇一八年）。

(7) 徳植俊之「梅尾類切」考」（『汲古』七二、二〇一七年二月）。

(8) 海野圭介「データ蓄積とドメイン知識の問題―万葉集を例に」（第7回日本語の歴史的典籍国際研究集会、主催：国文学研究資料館、オンライン開催、二〇二二年一月一日における口頭報告。ハンドアウトは[https://www.nijl.ac.jp/pages/cjproject/images/njl\\_sympo2021\\_handouts\\_3-1.pdf](https://www.nijl.ac.jp/pages/cjproject/images/njl_sympo2021_handouts_3-1.pdf)から配布し、当日の報告は<https://www.youtube.com/watch?v=zp61LMDPslI>からYoutube配信している。二〇二二年八月三十日確認）。なお、この口頭報告の成稿の途上で今回の報告に至る調査を進めることができたため、本稿

は右記の報告内容を含むかたちで海野が成文化した。

(9) シンポジウム「古筆切研究の未来 文理融合研究の成果 第一回」（主催：国文学研究資料館・実践女子大学芸芸資料研究所、於：実践女子大学、二〇二二年七月十日。当日の内容は国文学研究資料館のYoutubeチャンネル ([https://www.youtube.com/channel/UCmv2nV\\_UJKz9H6905T7w](https://www.youtube.com/channel/UCmv2nV_UJKz9H6905T7w)) から配信している。二〇二二年八月三十日確認）。

(10) 当該資料は、従来考えられていた以上に複雑な資料であり、その書写年代についてはいまだ明確な判断ができていない。ここでは従来考えられてきた書写年代を示すにとどめたい。なお、注5参照。

(11) 注6掲載の田中論文二一五―二二二頁参照。

(12) 注7掲載の徳植論文参照。

(13) 注5掲載の『和歌文学大辞典』には「もとは冊子本か」とあり、小松茂美編『古筆学大成 一二』では、「装飾下絵の画趣が著しく精彩を欠く。しかも、本来連続すべき」「下絵がつながらない」ことから、「手鑑に貼るために、はじめから断簡として作られたものと推定」している。

(14) 古筆切の例については後掲注15・16参照。浮世絵の改変の例については、リチャードレイン『浮世絵 消された春画』（新潮社、二〇〇二年）に鑑賞に不都合な部分を切り出して巧妙に改変された春画の例が示されている。

(15) 例えば、藤井隆・田中登編『国文学古筆切入門』（和泉書院、

一九八五年）二六～二七頁に伝飛鳥井雅経筆六半切『古今集』の例が示され、「右端の歌の下句のみの一行や、左端の詞書や作者名のみの一行を消去して、余白として見た感じを良くする」と説明され、「この消去は古筆切にしばしば見られる」と指摘される。また、佐藤道生「日本漢学研究に於ける古筆切の利用」（『慶應義塾中国文学会報』三、二〇一九年三月。 [https://koaralib.keio.ac.jp/koonips/modules/koonips/detail.php?koara\\_id=AA12810295-20190329-0125](https://koaralib.keio.ac.jp/koonips/modules/koonips/detail.php?koara_id=AA12810295-20190329-0125)）（二〇二二年八月三十日確認）には、漢文文献に付された付訓が削除される例が示されている。

(16) 例えば、田中登編『平成新修古筆資料集一』（思文閣出版、三六一三七頁には、伝尊良親王筆土佐切『和漢朗詠集』の例で、同集下巻「故宮」題の漢詩に「風」題の和歌が呼び継ぎされて一紙として構成されている例を示し、「この切は全然違う所に位置する作を貼り合わせてできているわけで、古筆切には、このように一枚の断簡として形を整えるために、しばしば手が加えられたりするのである」と指摘される。その点、注意が必要である」と指摘される。

玉津島能見而伊座青丹吉平城有人  
之待問者如何

たまつし まらくろく せいもせ あはらむ

うし れつひとせ おちぬい

塩満者如何将为踪香方便海之神我

手渡海部未通女等

てはくしぬいりせむと。やうんか

うそやうろあまのつとめら

くしうべーてるもの  
少くもなほつと  
とみしうくひもたの  
まふ心

大伴坂上郎女柳歌二首

吾背兒我見良牟佐保道乃青柳平手  
折而谷裳見綵欲得

わがせうらみしむとほら比あな  
たふりてうまふ

打上佐保袿河原之青柳者今者春部



図3 国文研蔵本5行目14文字目「神」。金泥による描画の上に墨書されている(40倍)。



図6 橘樹文庫蔵本8行目9文字目「青」。墨書の上に金銀泥で描画されているように見える(20倍)。

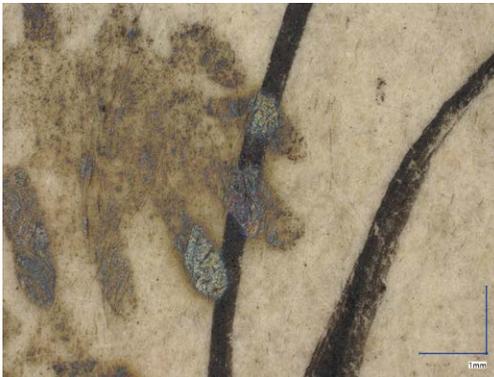


図4 国文研蔵本4行目11文字目「は」。銀泥で描画の上に墨書されているように見える(40倍)。



図7 橘樹文庫蔵本8行目9文字目「青」墨書部分が下の金泥ではじかれているように見える(1000倍)。



図5 国文研蔵本5行目11文字目「便」墨書の上に銀泥で描画されているように見える(40倍)。



図8 橘樹文庫蔵本8行目9文字目「青」墨書の上に銀泥で描画されているように見える(100倍)。



図9 国文研蔵本4行目7文字目「の」 繊維の断絶が認められる (40倍)。



図10 国文研蔵本7行目5文字目「は」 繊維の断絶は明瞭には観察されない (40倍)。



図11 国文研蔵本3行目1文字目「た」 左側の縦線部分の一部に料紙の断絶が認められる。右方向に向かって料紙の断絶は明瞭には観察されないが、窪み部分に微少な粒子が付着しているように見える (40倍)。



図12 橋樹文庫蔵本4行目5文字目「見」 皺のように見える部分は墨書されていると推測される (20倍)。

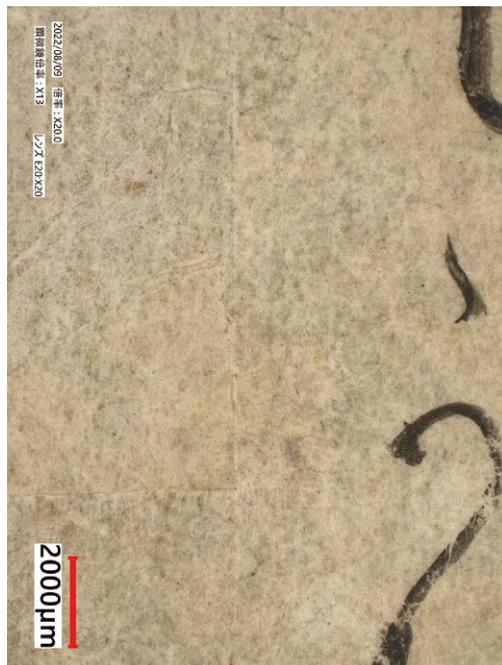


図13 橋樹文庫蔵本3行目13文字目「か」の左方部分 直角に裁断した跡が認められる (20倍)。

